琉球大学学術リポジトリ

近世後期における琉球国の社会経済史研究－人口・貨幣・物価を中心に －

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学 公開日: 2022-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比嘉, 吉志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017928

様式第７号

学　位　論　文　要　旨

学位論文題目

近世後期における琉球国の社会経済史研究―人口・貨幣・物価を中心に―

琉球大学大学院
人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

学籍番号 [redacted]

氏　　名　　比嘉　吉志

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数８００字程度）

本研究は、近世後期（18 世紀後半～19 世紀末）における琉球国の社会経済史の研究として、人口・貨幣・物価について検討するものである。以上のテーマは 1980 年代以降に目覚ましい進展を見せた近世琉球史研究のなかで、十分な議論が尽くされていない分野となっている。その一方で、十分な実証研究の積み重ねがないまま先行研究の祖述が繰り返されており、それが極端な歴史論にもつながっている。本研究は社会経済史のなかで記述的なアプローチを中心に、近世琉球の人口・貨幣・物価を考察する。

第 1 章では、近世琉球の人口史料と近代沖縄の統計資料を接続することで、近世後期の人口動態に大きな矛盾があることを指摘した。これまでの研究で総人口が減少していたと見られていた史料からは、女性、沖縄島の百姓、身売り人など多くの人が欠失していたことを明らかにした。また、人口推移には地域性が存在しており、増加傾向の沖縄島と減少・停滞傾向にある離島地域という特徴を見出すことができた。

第 2 章では、近世琉球の貨幣論について論じた。従来の金属貨幣に限定されたものではなく、実物貨幣と信用貨幣という視点を立てて近世史料からそれぞれの具体像を整理した。また、17 世紀～19 世紀にかけての王府による銭貨政策の変遷を検討することで、自国鋳造銭貨を断念した背景を考察した。19 世紀後半の「唐銭」流入と流通、新鋳銭貨問題についても検討を試みた。

第 3 章では近世琉球の物価研究をなす前提として、①物価史料の性格と王府の物価政策、長期的な推移、②「諸物代付帳」と仮定代、③「文替り」について検討した。王王府の物価政策の失敗と仮定代に象徴されるように、従来のイメージよりも価格変動に関する市場の影響は大きく、王府の政治的な意向だけでは操作し得なかった。「文替り」の混乱も、銭貨経済のなかに生きていた都市民により大きな影響が出ていた。